



繪本忠臣藏

藏

中村進午文庫

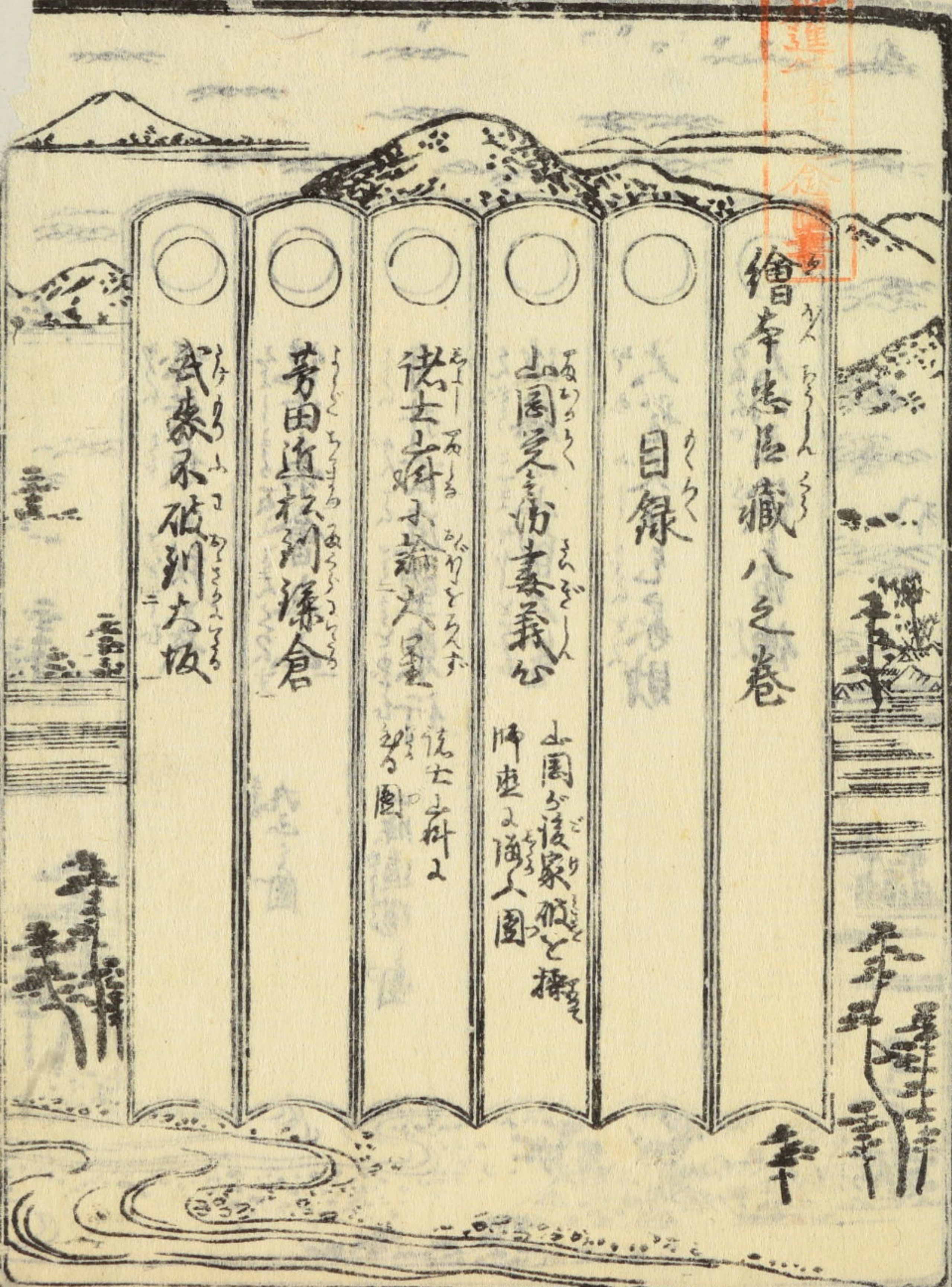
文庫 5

702

8



榮進



繪本忠臣藏八之巻

目録

山岡定吉 坊妻義心

山岡の後家 破と標

徳士 山科小論 大星

徳士 山科 2

芳田道松 河原倉

武蔵不破 洲大坂

所屬 HBS
IV
513 8

圖書

所屬 HK
部門 中村種文庫
巻 9690
小 8

文庫 5
702
8

昭和五年一月十日
中村本天氏

昭和五年十月十七日
法華堂研究室より検査

堀井原の勅義

佐土赤會丸山

丸山圖

寺井玄度望東行

四條道場圖

近藤小山留六

大野笑子乞家財

天川左儀傳



繪本忠臣藏卷之八

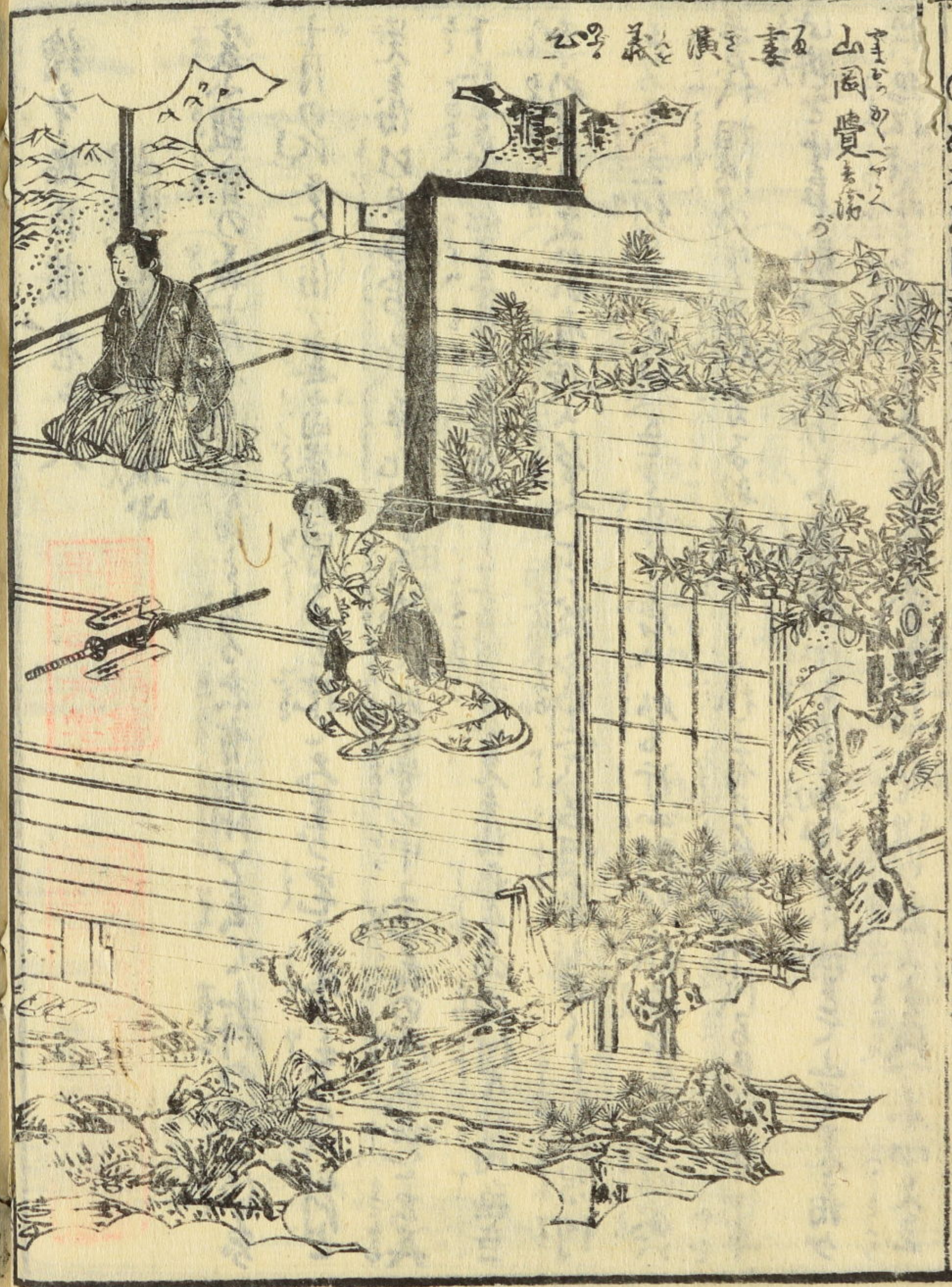
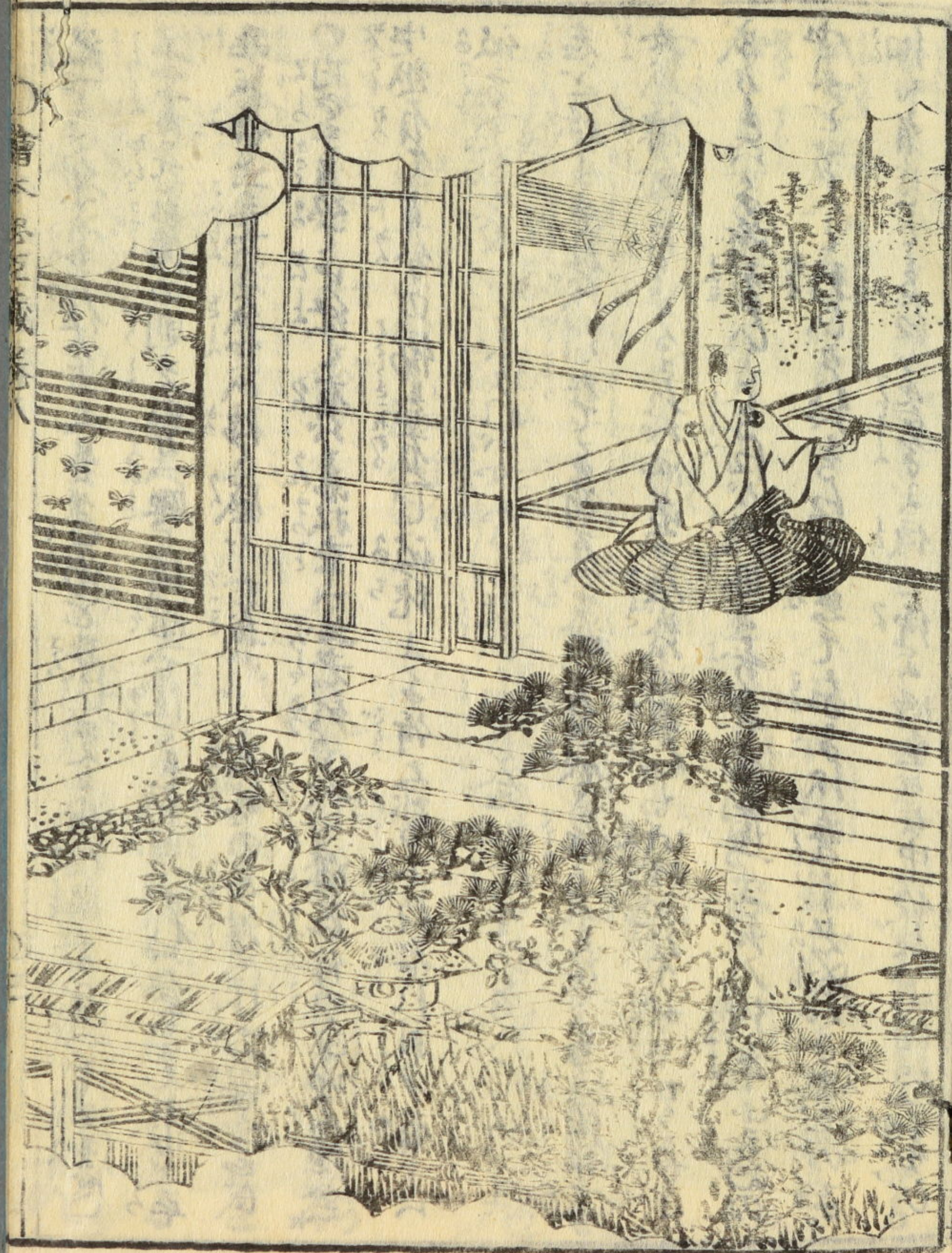
山岡先生傳妻義心

早稲田大学 圖書館藏書

山岡先生傳妻義心

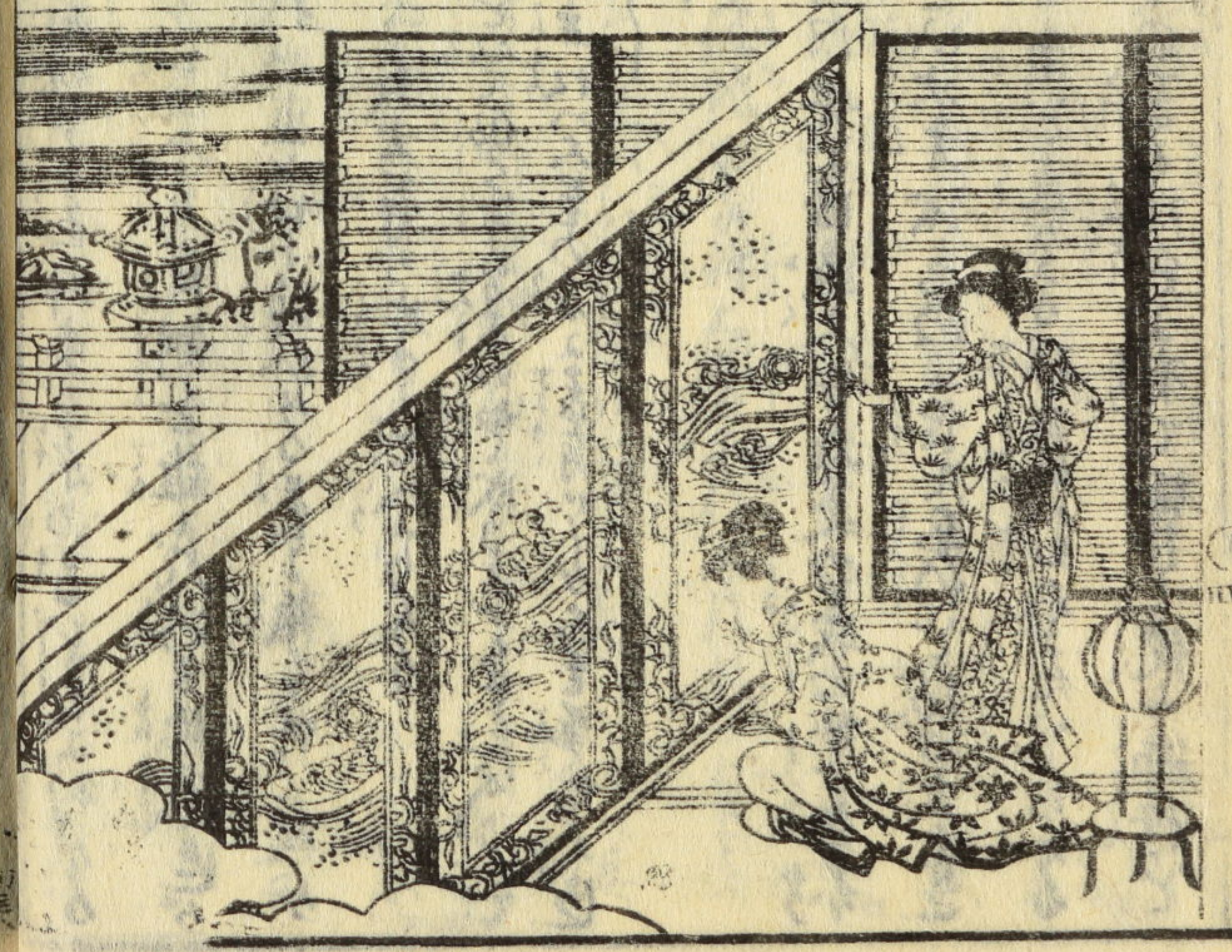
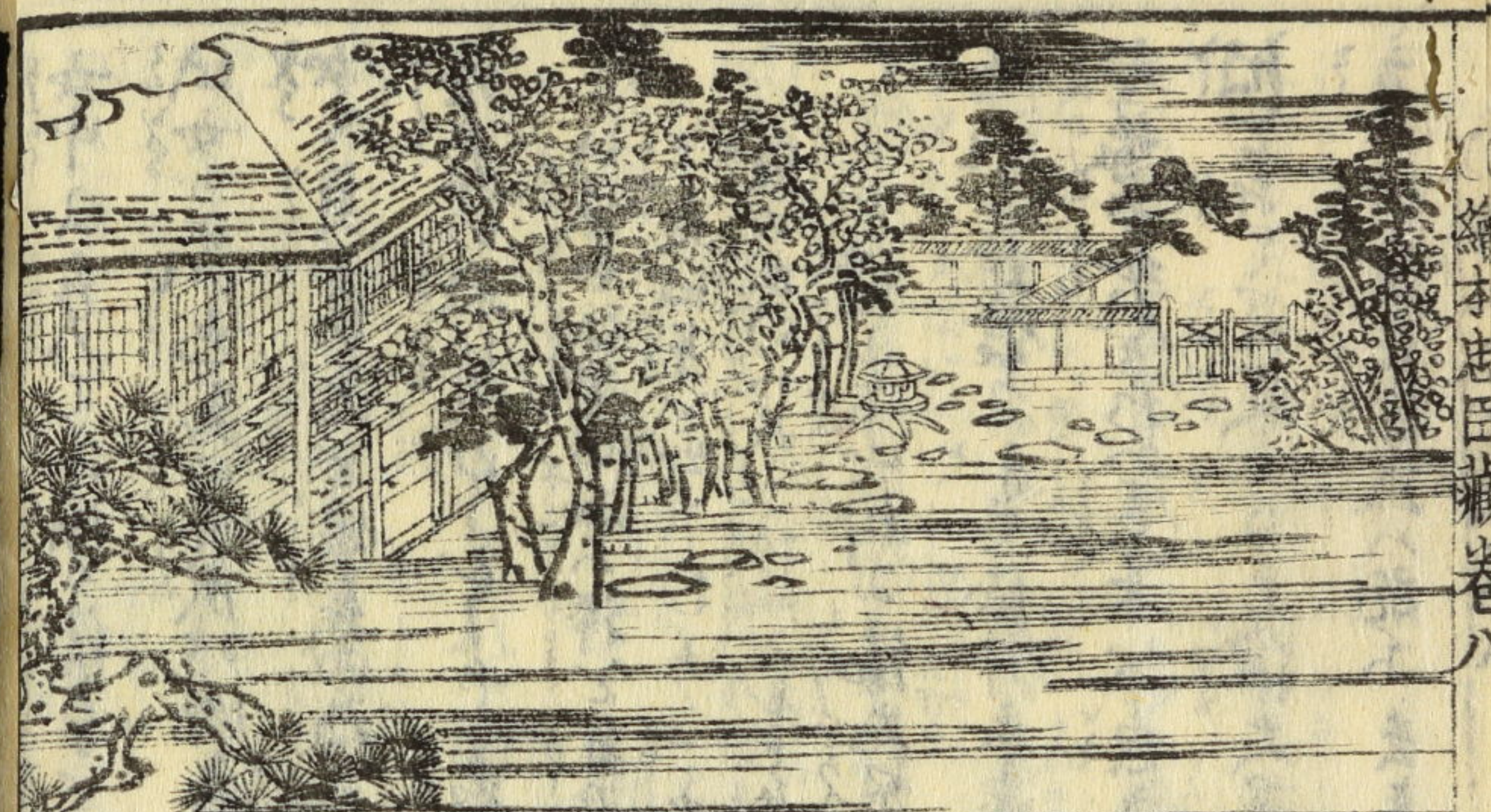
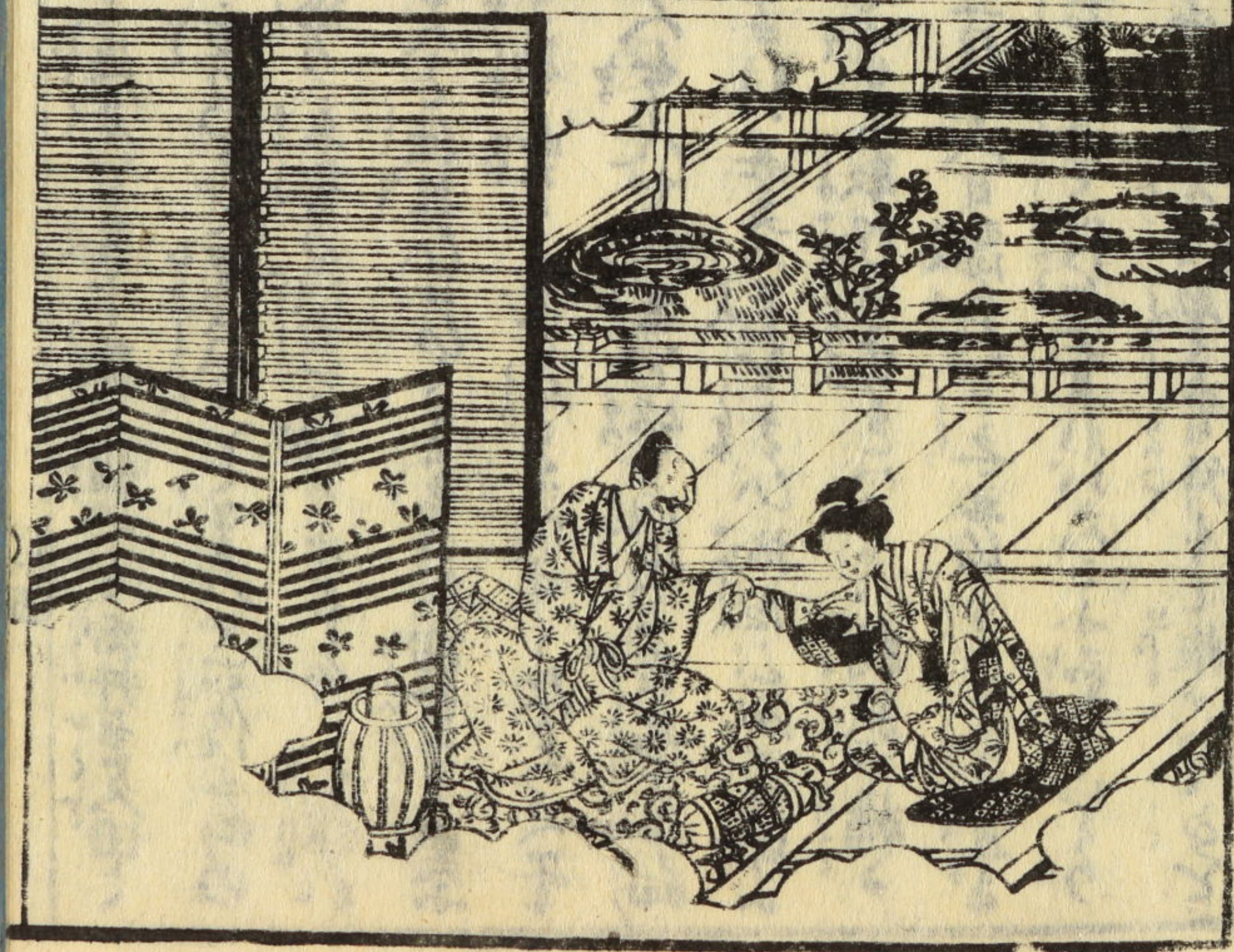
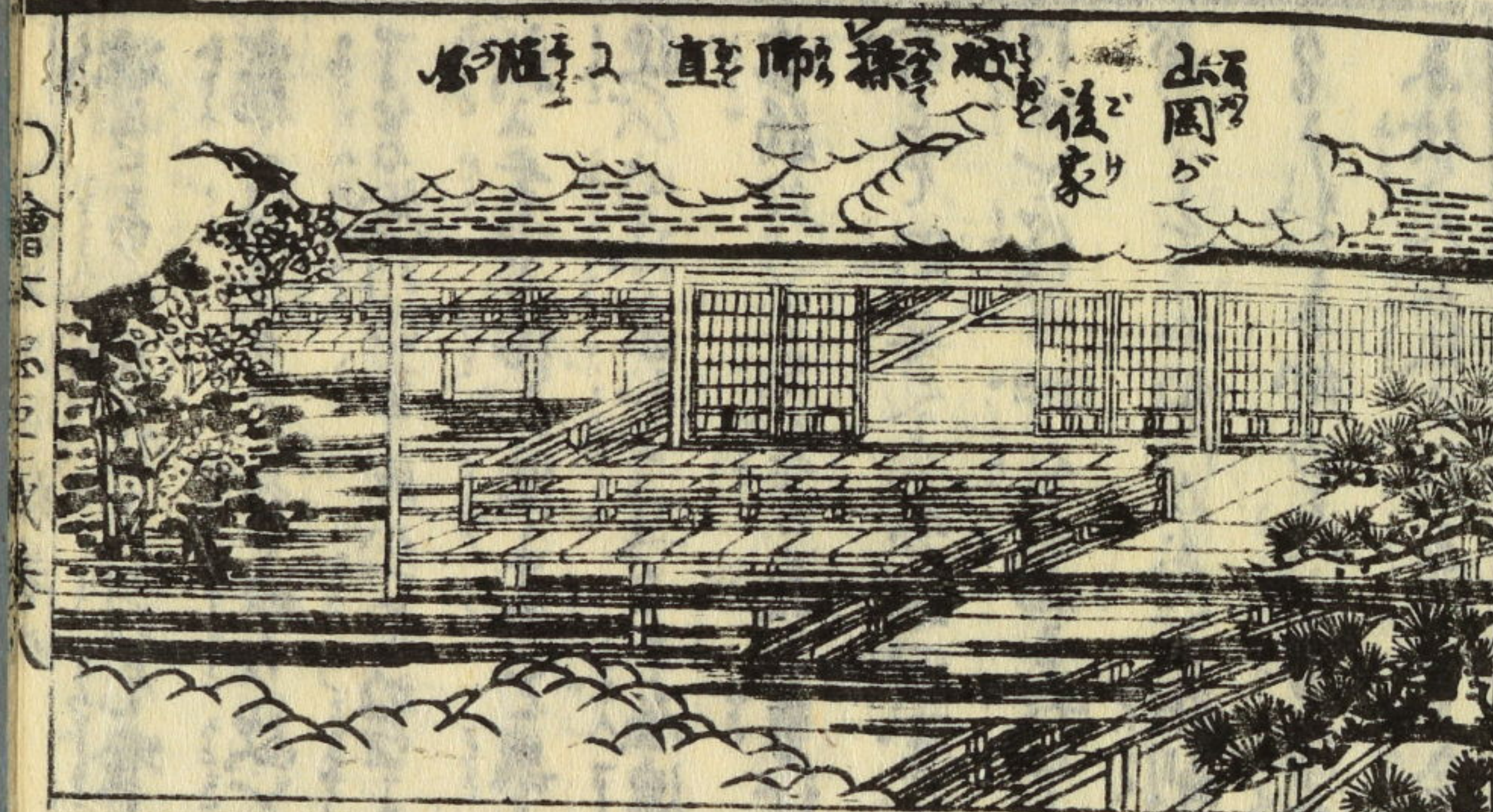
宗盟會の義士山岡先生傳とて老青伯州とて去てお料の思ふ位
十月の比先生傳が妻南菜の男子を抱てお星が宅におりて
先生傳は日おおる年北社を現示肌の守の中へ亡者の所成とて其
下にお表の能て其ふ天衣裁とて事用先生傳お生の内何れ得難き
事救多し其いかに有辞とておとておとて何事とておの何
とて先生傳何とて生議とておとておとて何事とておの何
お代相傳の中へ君男子おとて中へおとておとて何事とておの何
お牌を中へおとておとておとておとておとておとておとて
おとておとておとておとておとておとておとておとておとて

山岡先生傳



山岡覺
義弘

山岡覺
義弘



繪本世田屋物語 卷八

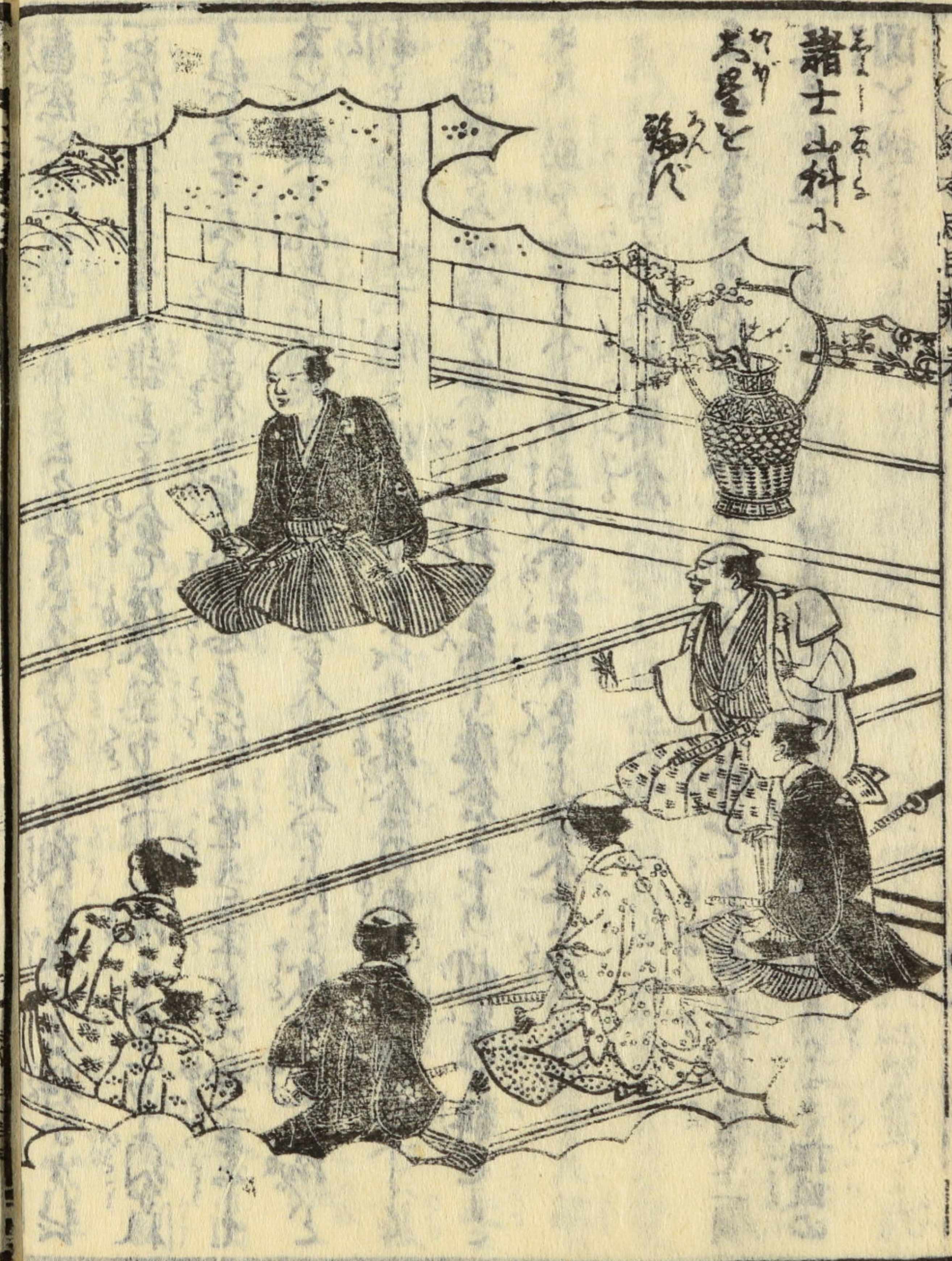
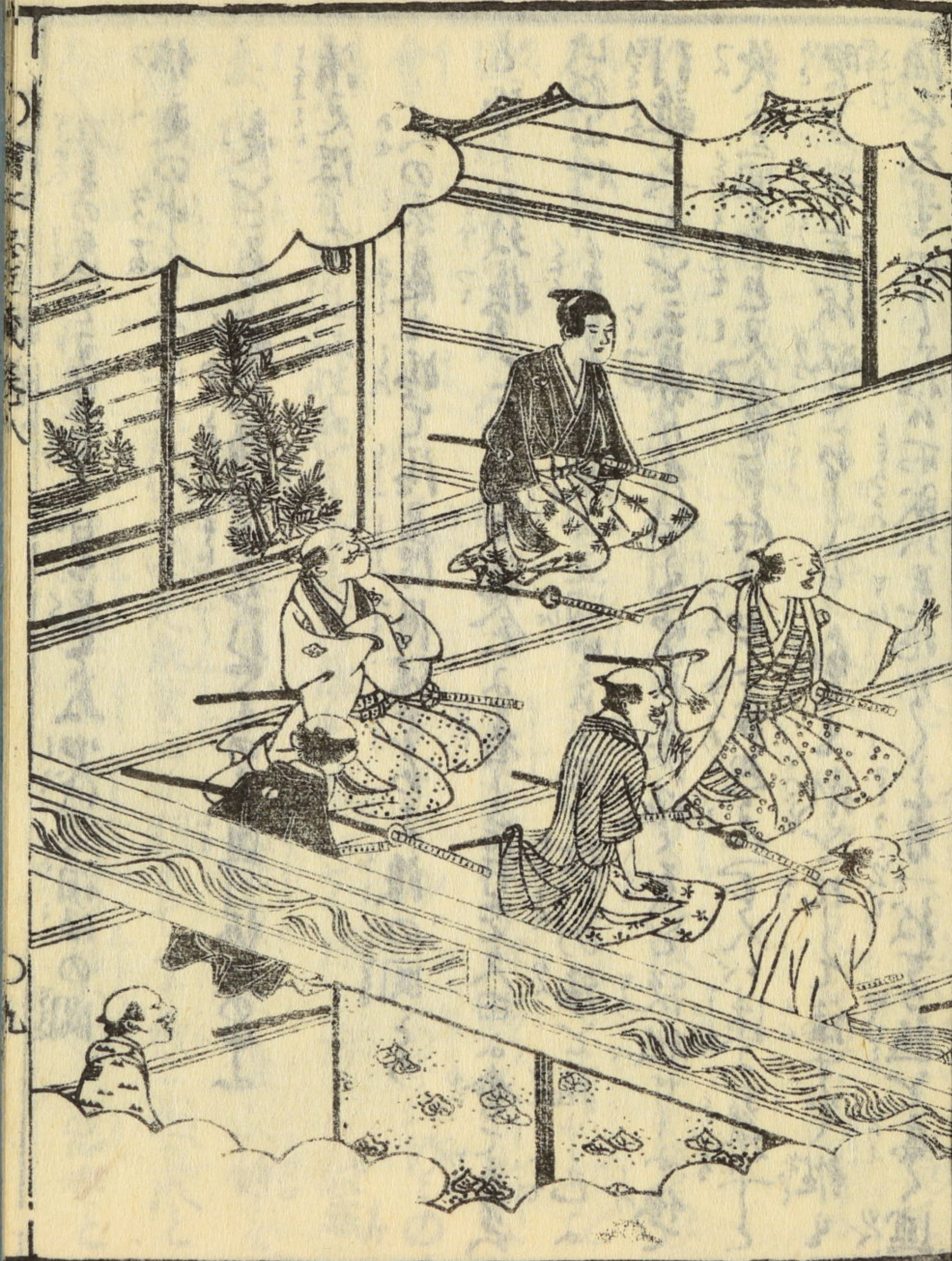
碎きも人日雇成時八食と止身と多ド故と何いか堀井を久田と
 竊の法ドクハか規り故と重りまで定ぬ日とこえや正佐土料の
 了方延門の事成ハ一先如き油り事費の同士と効りはも分と引離れ
 折の意と結び速と事と果入と社思ひりいと云ぬ大堀井を久田宗
 収びけ係承を付りき後速に取ら幸と斗らるる危くたくと大星
 信弱形りとも幸ら義と勇じんや人や利害と以て同士の事あは下向
 有こそ肝要くとたふ同へて一も再入八毛ともい捕治と治せ速よ
 同士と僅一押付下向と事しともよ取極よ事色バさバ極放ハ痛の
 危くとも不似口ならと相副二月十八日豫念と云ふぬうてぞ自意
 りるが事部の義士高澤念の長と信使有れはたふ事勇とやり
 系伏人土飯の同志ちり合山科よ其て取會伴とと維ナ里とと

怒ぐん法士よ向て云らるる者動もといふぬ急がりの池家と云ふぬ
 志角三月と云ふ天嗣の事ことと果入んは有らるる自然是利家の命
 たり堀谷の家法建と云ふ事於てハ一業として執と獲入ハ是則如ハ
 の怒りぬ時ハけも女一人一業の義士よ代て先物りの事と云て
 所並一憤と違ふ一又たとハ女ハ帰る天嗣君一折と下らる事於てと
 亡君の事於ぬ時ハ者ハ合と云ふ事と日ハの事と違ふ一か合今
 以かよ事ハ有事形しと云ふ事ハ京ハ序と事ハお退て鳥よ事今
 け長女居作の事ハ極極後事集て終ハハ義成然と云ふ事と云らる事
 三月今と事と笠約と事と事者ハ事及ハハ後事と此加者ハ誰
 活て事と事と問る者ハたといハ中家後ハ事とも事と事ハ誰ハハ誰
 中家自事の上と事今ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事ハ事



三つとてその者の者共の皆腰拔とて人々の未何とあれは信守の志
 二伯州と死損たれば今更生ても家禪門に成てておぬは燃火者之信を
 序と打て強とて信士二月の月と括へるはいつともいへるは其
 義理の成んと同じくする時又誓ふ吉地田中助介ホ云なるは皇
 氏の殉難のありは先代大家又是と云ふは功業とてある時目もた
 愛するは悔禍と云ふゆは上嗣の誓れり内かく尊順と遂に
 放てし潮は程の多る奉へ有まじふ是州家の作下て世もも又後
 仇と報ては是嗣の成亡るをいふは功業とてある上は名と願ふ
 ともとも其志の成るは只遠くもいふ果はた利のつと云ふは吉田
 仲たらし小寺角も二月の月お再興の両端の中は助介の別
 功入左のとき赤木の希正の齡は乃びり程の経賃成の死かのみ一
 番と社を建てしと云ふはたゞく大星を何と復するは神ふと長

下谷のいへ大星の誰ともいふは深念より十と流るの二つに分れ
 たり大星なるは名と有り名の誠忠な程に堅と奉成は必一書とせ
 末とて平統とて嗣の浮沈も見ざるは責とてたて流し極と
 制するもた士は又修後しては又深念の勇士は許む下と
 吉田徳をの道ねと六名性名とてまた深念を下り村害と解を
 中々助下をさるふより故人名名深念と深念をとりたる
 吉田道ね列孫倉
 を後吉田仲たらし道ねと六の大星が命とて又名名深念を二月
 正百の事とておのり吉田仲たらし名とて奇たと好りたるは相攻の
 関と越る



諸士山科小
大星と
歌代

諸士山科小

歌代

九書の書と目けて出る日も墨下代と相波の園

佐夜の中い

夜とて燃行旅の定むるものあり佐夜の中い

清見原

其の原處も燃て清見原月夜をりよ浪の園より

と海日較快りて三月首海念よ着一海井を久田よ會て云々

は後山科よええり平既よ五回中はぬぬ延引の海と船と已よ

引難とと云暮りたはも中居亦振く哉と況破りし後て

後三回忌と人會きて耐よて言ぬ人一人は遠よ新十と

際と世言派取てもしりぬも教と托して海すや維も

流石大星のよれぬ所成は是能やう上第一致する越と委く述

々ねは海井興田の延引の候はぬ思ども船美の上の思えとぬて

弾ととよ非は以上は是能よる久共時神と人合色し一印なる

武森の破到大坂

初よ六とに武森森多人不徳をり三月初り大坂よ着し京にたつ

高下よありて豫念のふせと委く池う海井を久田が云々り越と

述々ねは京にたつたを不徳びつらく上の方の候も派清り三月山科よ

會して既よ云ふ多んと編ととと大星よぬくと多れ越くの

を尾く芳田道松姓をよ下向り越と清りた其哉

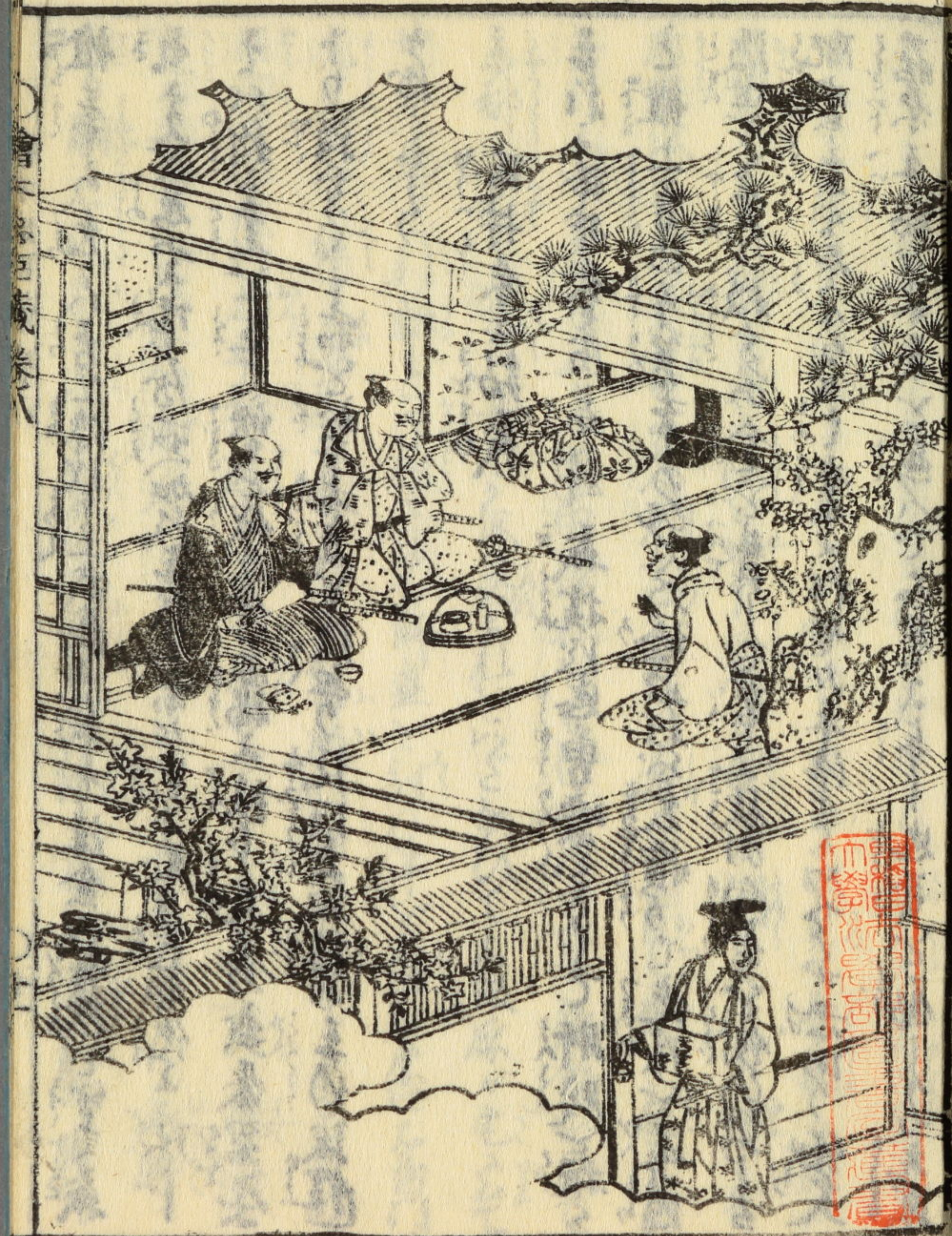
委る能也とすてたを不徳をたかひよしぬ士りてい海す小辭も

算をよ田必びあふとくたは美必定能美よ不別とて事終り成り成と

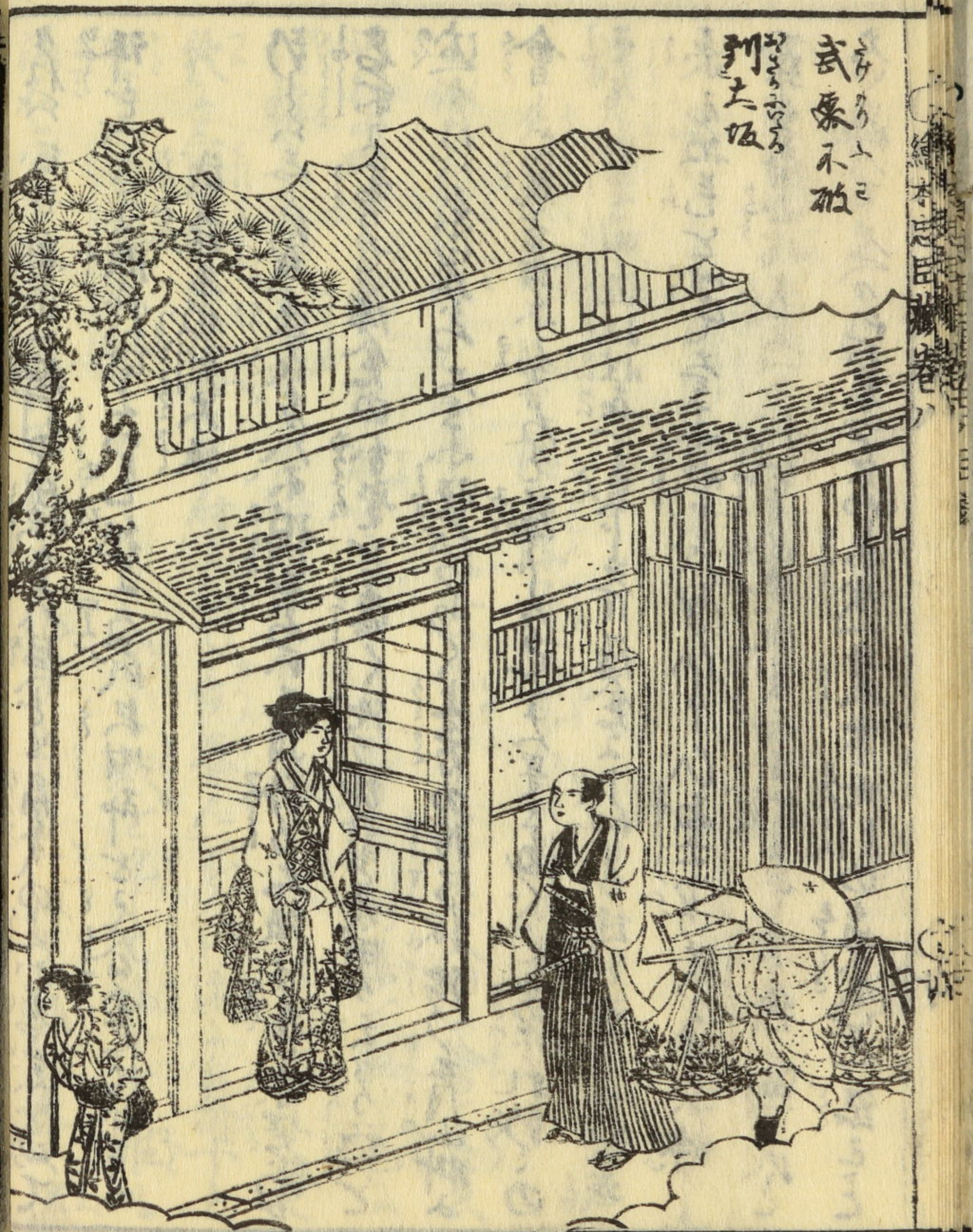
たの海へて入へたれぬ事つたら事終り一事事延引の能也と一張こと

會大星の破到大坂

廿



武原不取
判大坂



維新の志士は、彼に上武蔵の孫念の有様と告げ、
元々又忠告をせよ。加茂長七郎が宅に來り、是も彼も、
そは新の妻と立て、徳と代人と、竊に、或は、
より、或は、或は、或は、或は、或は、或は、
を、を、を、を、を、を、を、

堀井原の勅義

堀井原の勅義は、
と維新の志士は、
後世も、
配書も、
在、

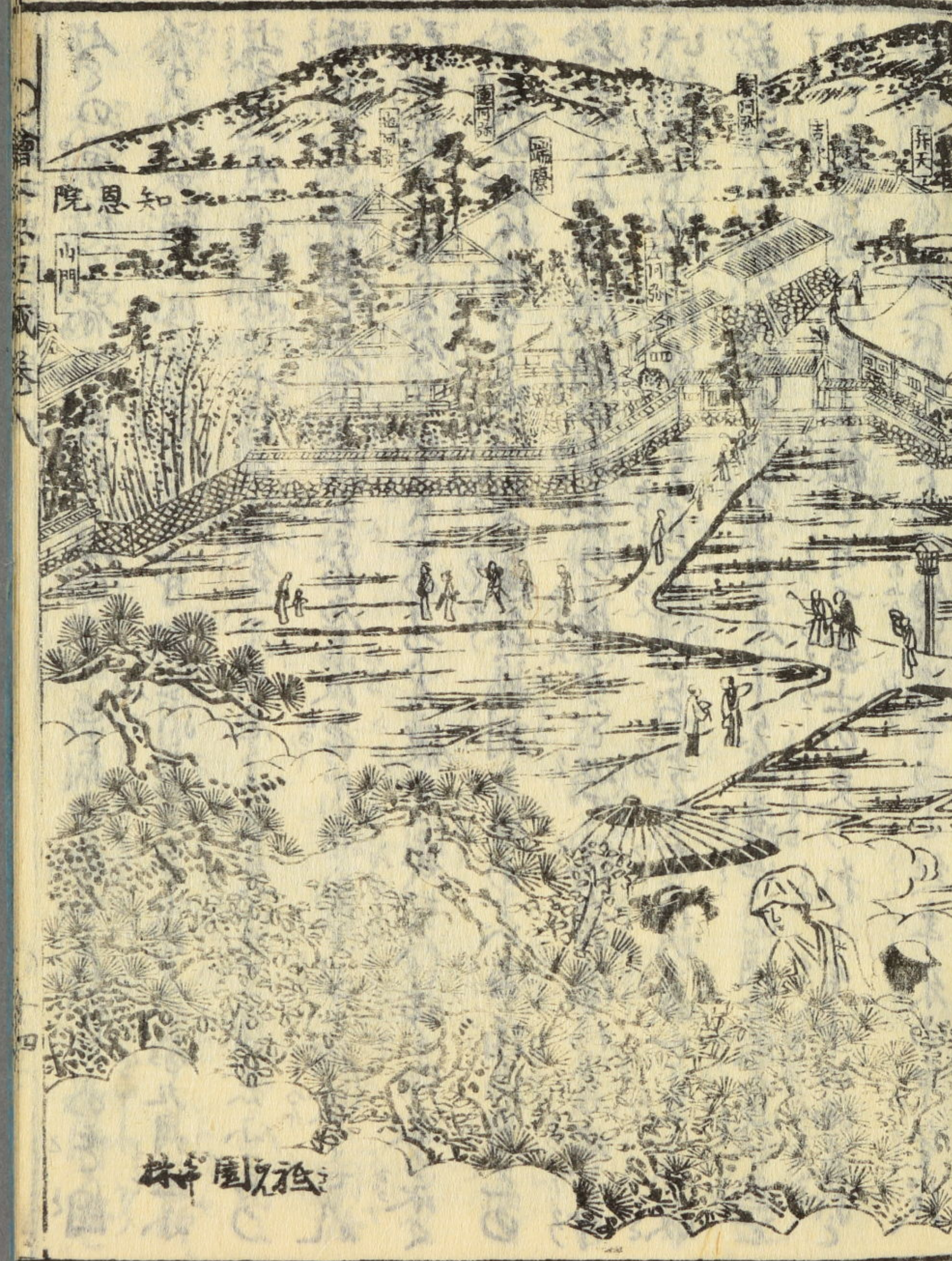
堀井原の勅義は、
て、
義士も、
形容、
堀井原、
京都、
元、
日、
定、
堀井原、

是とすこゝに打て然傷今社を皇氏の思ひ残せる事との区は六
 一運せりぬと先法門士の命を變てて思ひ返す事自直
 料よりしてせしむる也若き苗の忠状とてせ運は危計と料の
 事伏見の坂赤尾の間に傳へ日月は合未國山を河原の原に
 於て命を定む下と領納す

諸士を會國山

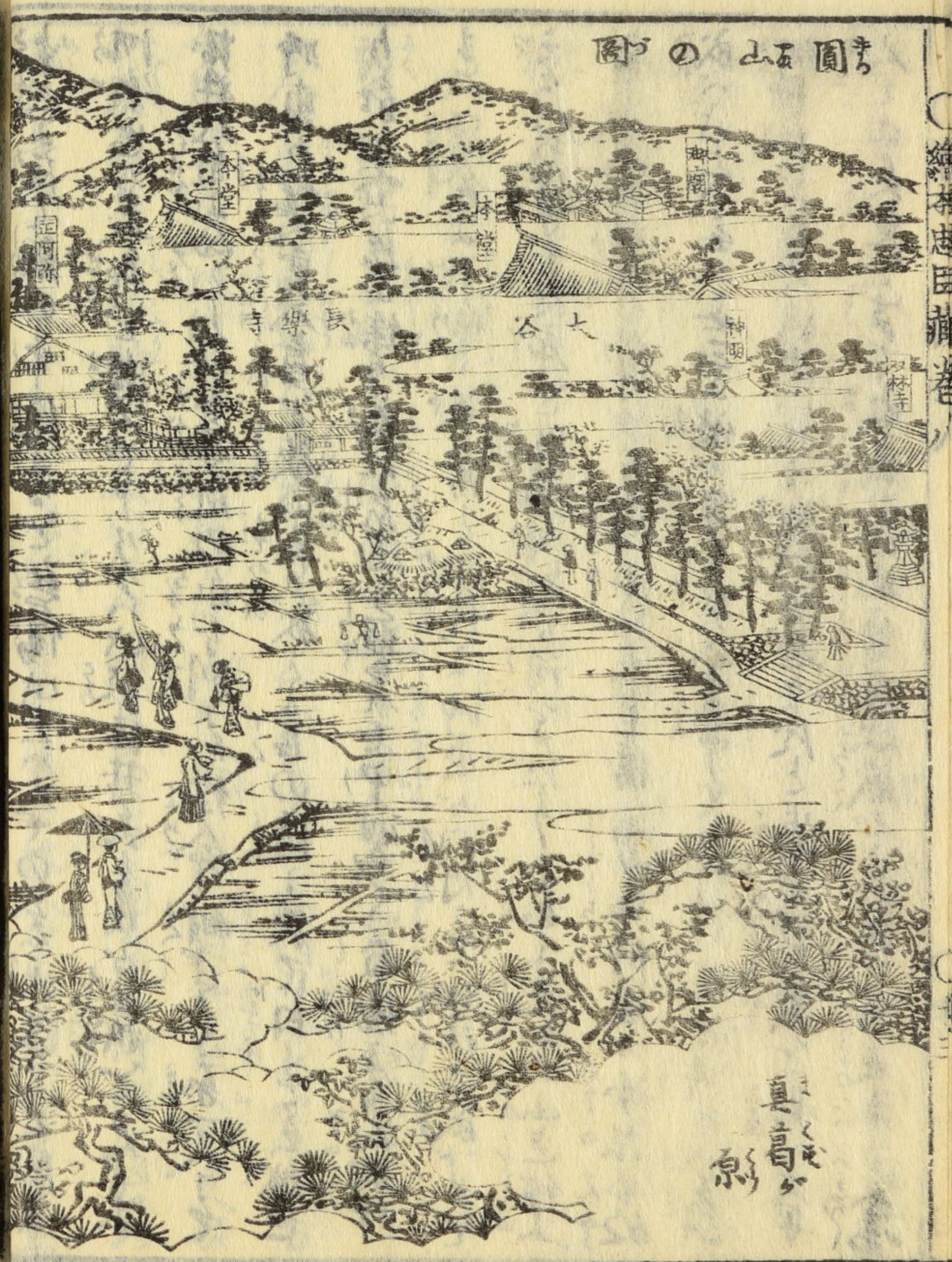
功て坂井が忠状を得跡の探有義人等よりお來り七月
 廿八日國山瑞の原に集る人々を大星中將は助刀你原に
 千内河老若く河原忠を美河孫十郎坂井安房佐田助と大星中將
 武康多八村中助助不坂門なる海賀美なる大星孫四郎清なる
 武康多八村中助助不坂門なる海賀美なる大星孫四郎清なる

望と在て翻の事作ると然傷け上へ人の命を思ふと
 河原忠を美河と進んでトククは坂井安房佐田助と大星
 坂井八百屋と向くとして上原の命を別るは命を別るは命
 河原が實入首と欲の弄りぬるは道の終て白くは世
 りおと又六指の飾り若れぬと之を甲斐にせぬも必死に
 まは謙念と下向くは實入首と相成り河原が一月して切死
 云々小寺千内河と進み河原が河原にたうし死か山に傳へ
 危し運もあはれといつる時坂井安房佐田助勇之河原が分
 成り成り上へ二二三の波が等々實入首とて敵陣を破り
 何ぞ是より人はいま一日も延びと危くばと菌と切て義と勅に
 人の長見とて名武の忠勇成り感ざる不絶り去る事



院恩知

林園



圖の山石

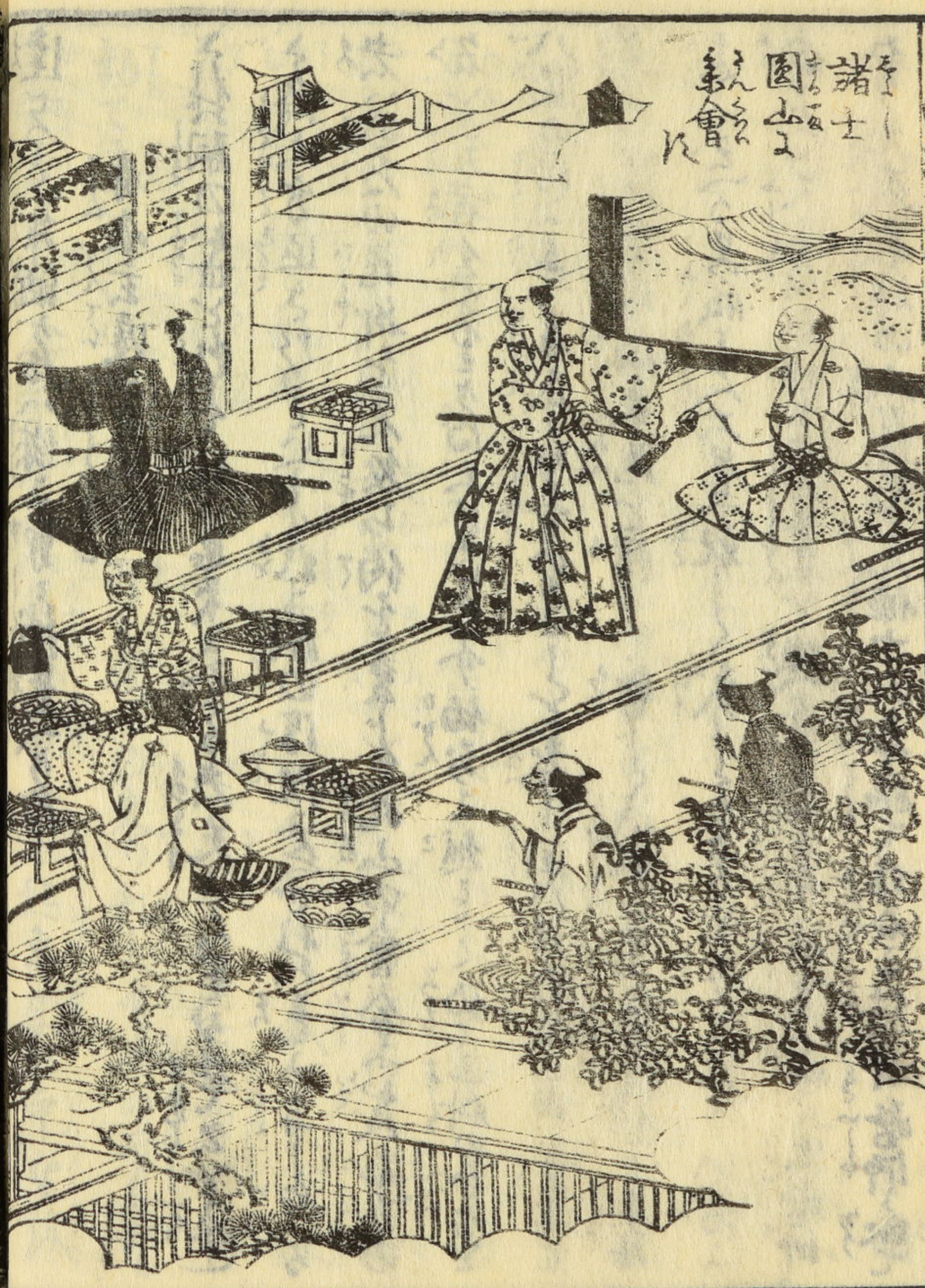
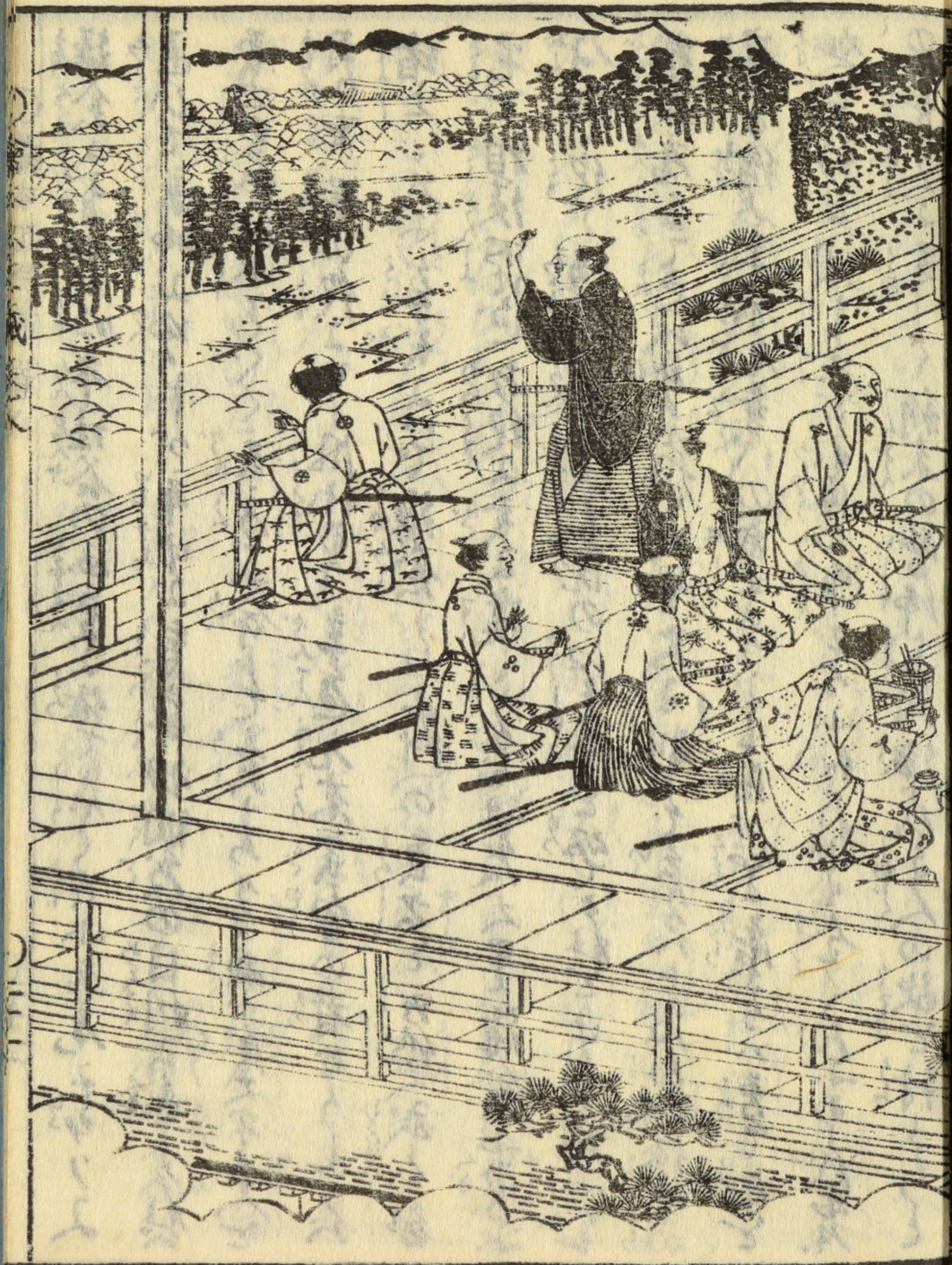
寺樂長 谷大

真高

人々の勇烈と宿て遂に及びしも忠義の命にまかじりてをこ圖
りて享嗣の浮沈定る上ハ一日も延びて危き小絶は九月五日
上方の用ひ次第し十日ハ鎌倉下は危し名先達て鎌倉小町の
必を欲の動轉と今そふ出さるる名中名助と以て櫻坂しりれ
かど歌と捨らるる斗もあつらん能今一人帰来し取らぬ
不義の名は清くも亡名の悪名派刺つるあはれ長柄り自己の
名をかゝるるべ嗣の毒害の場らと以て法士の隠れしる老と斗
けを以て彼と彼練しとる巨魁引ちとや忠臣の義と立てて杖
あまらうと勇氣何自小弱うて又下は産中の月士大坂の悪と
動て妻と也小寺子報と打て武士の交りれも有中の酒毒の
夢可笑く僅に糸口をらハ麻呂揚てつと起年來の年守保
達とと舞納らハ麻呂勇補是ハハ

寺衣玄達望東行

この嗣の世とれと他は忠義に今方老先は大事が楚とて
方時大方匠となりといふも我も嗣の浮沈に及ぶれ是は与しある
老ははなの花柳を足忽ら約をまどて丸山の會合小絶は長
名と死者多るる名は大事は長介ゆちも然とてゆて山科の山科と
八坂の信よと(農民)のまのまのまの事一因八月の事とて
急脚四條通場梅森危と信うて暫くいふも富原の柳の柳を
まるともつる其版も大事は一収くあつらうとてまのまのまの
命とて又子及び日士のお巻と扱つるまの寺衣玄達とて玄醫師
あり元來急脚の人及び元徳十二年始て埴谷一仕(付醫師)とて

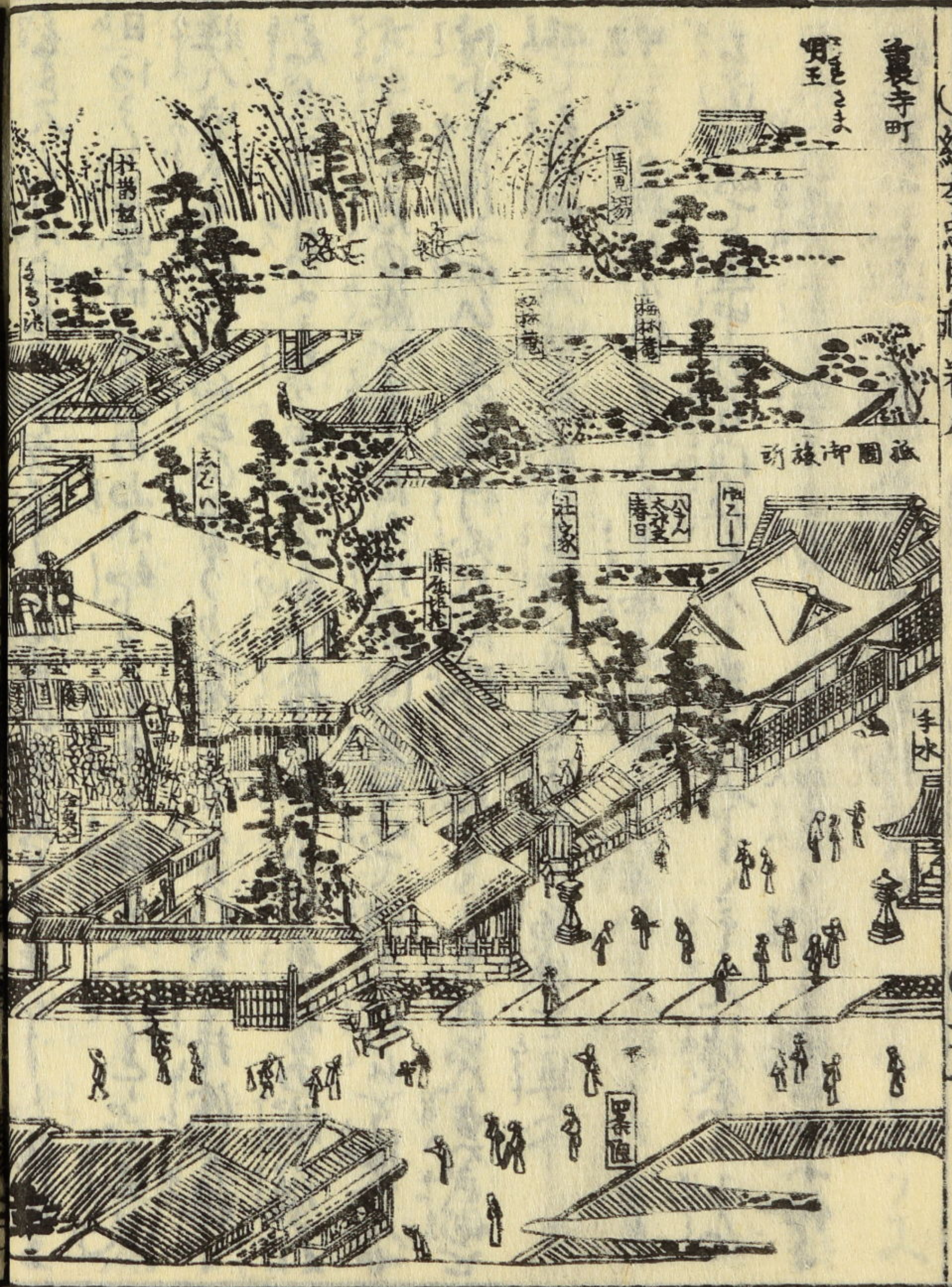
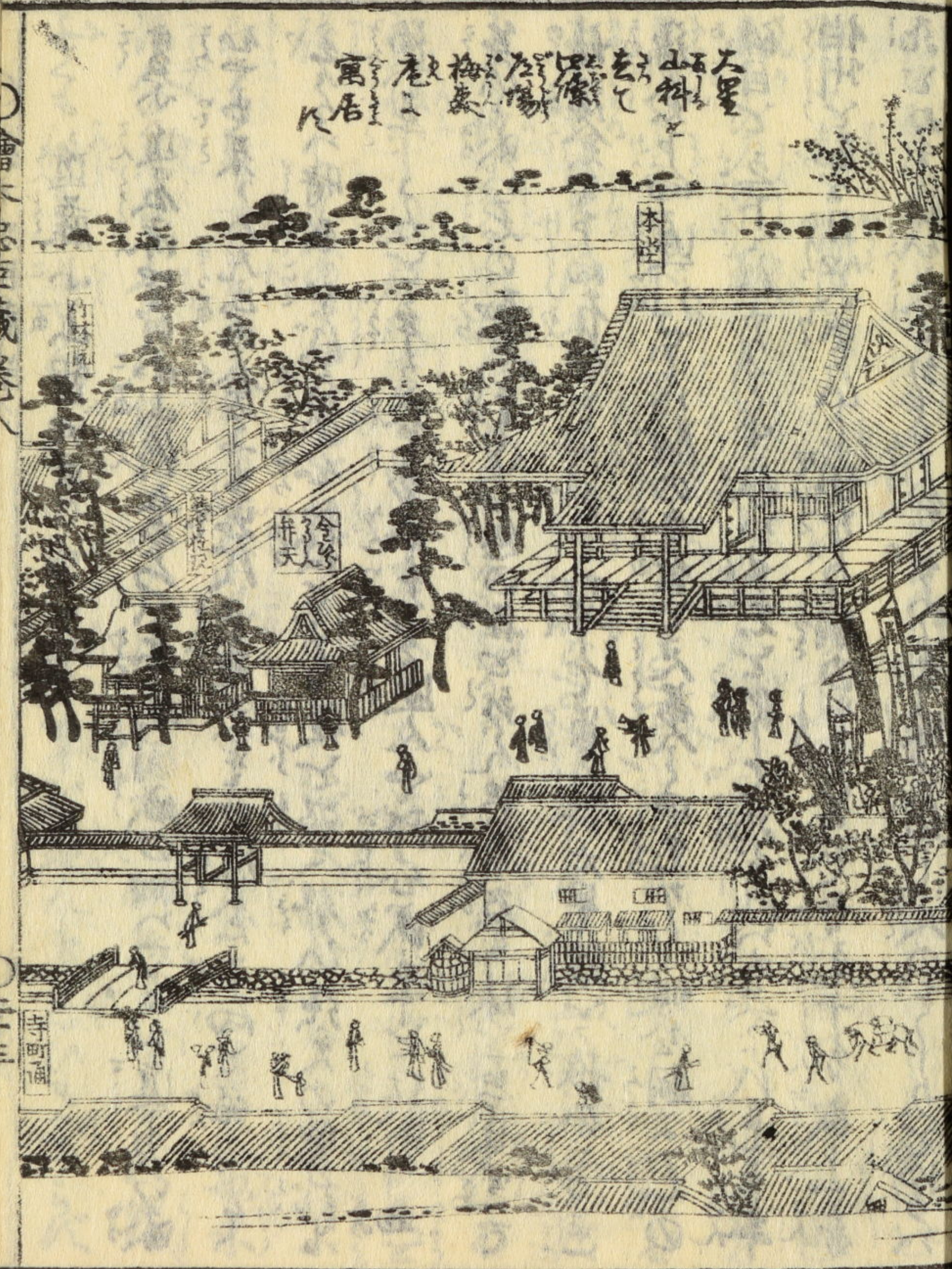


諸士
園
會

繪本臣補卷

謙愈けんよくと習しゆの年とし増ふはぬのぬまよ依よてた小赤尾こせういがり又
 正ただしてま師しとりが中中ちゆうの言言ごんの言言ごんの調調てうの目目めの言言ごんの言言ごん
 妻つとの言言ごんの言言ごんの命命めいどを責せめらる者者ものの者者ものの者者もの
 用もちの言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごん
 諸しよ士しとりの言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごん
 宅たくとり相あ後ご下げおい後ごとり進しんじらる者者もの大だい星せい謙けん愈よくとり又
 乃なんぞで使しゆ儀ぎの言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごん
 梅うめ妻づめ店てんとり之これの言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごん
 業ごうとり結むす大だい事じ亦また危あや難なん代だいの言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごん
 然しかどり之これはまえと不ふ良りやうな事事ものとり今いまもも全ぜんくもならずの言
 の言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごん

忍しのび入いる言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごん
 日ひの言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごん
 怪あやしみ言言ごんとり放はなつ言言ごんとり白しろとり止とまりとり又また流ながれ
 尾おがり一いつ日いちの言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごん
 尤ながりとり尾おの言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごん
 許ゆるみ言言ごんとり白しろとり止とまりとり又また流ながれ
 以もつ言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごん
 中なかにありとり許ゆるみ言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごん
 言ごんとり以もつ言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごん
 の言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごん
 其その言ごんの言言ごんとり後ごの言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごん
 其その言ごんの言言ごんとり後ごの言言ごんの言言ごんの言言ごんの言言ごん

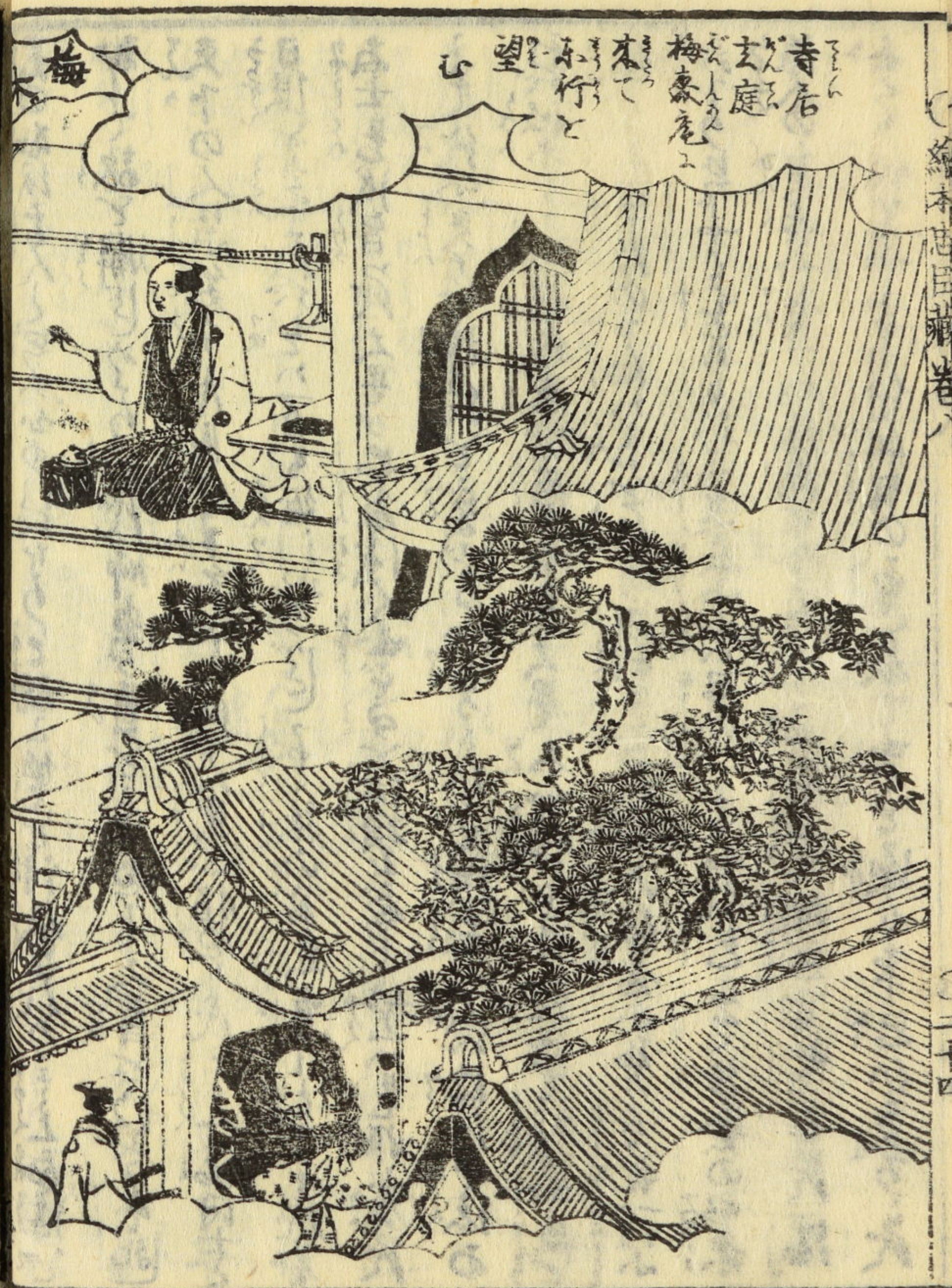
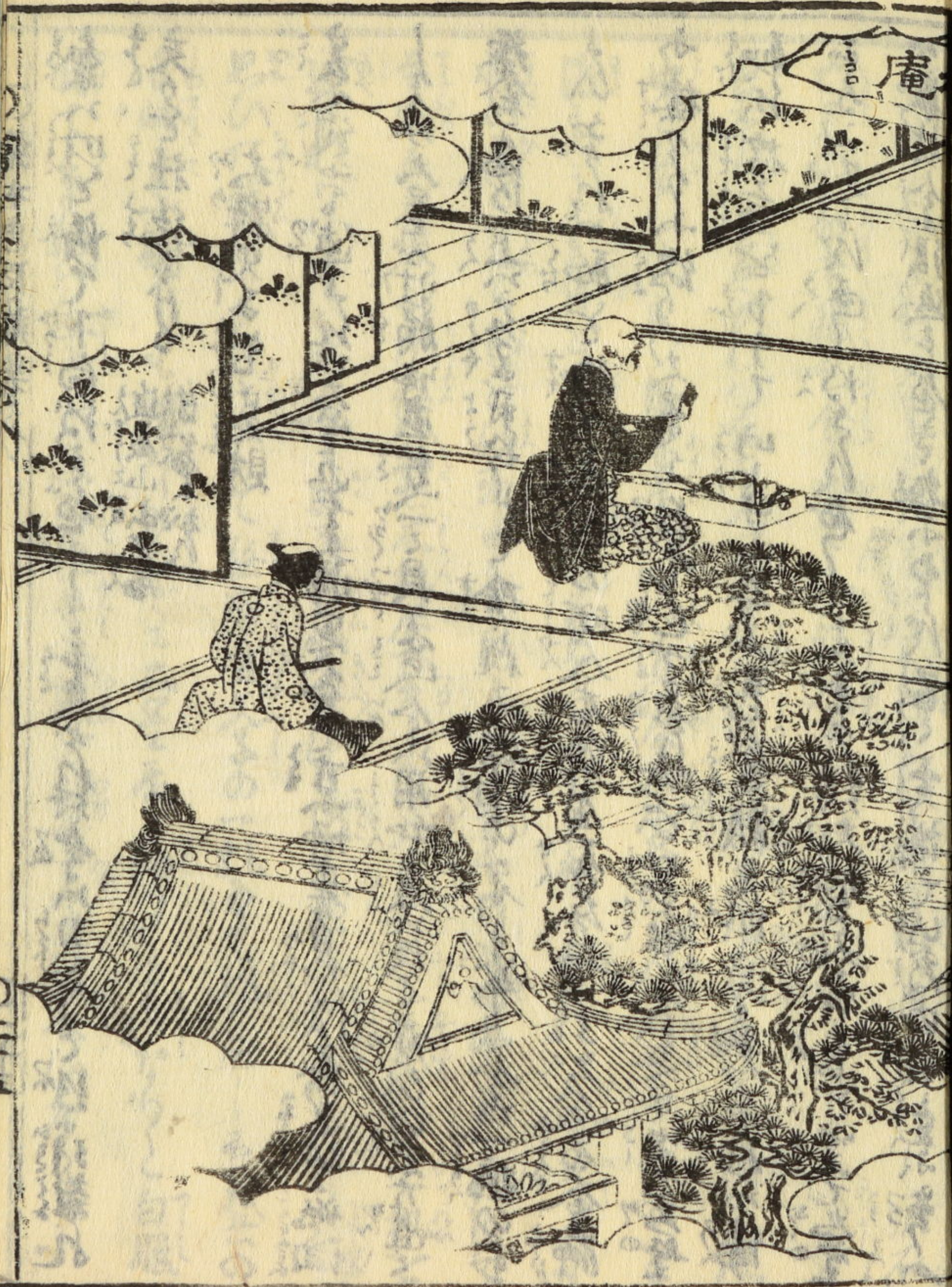


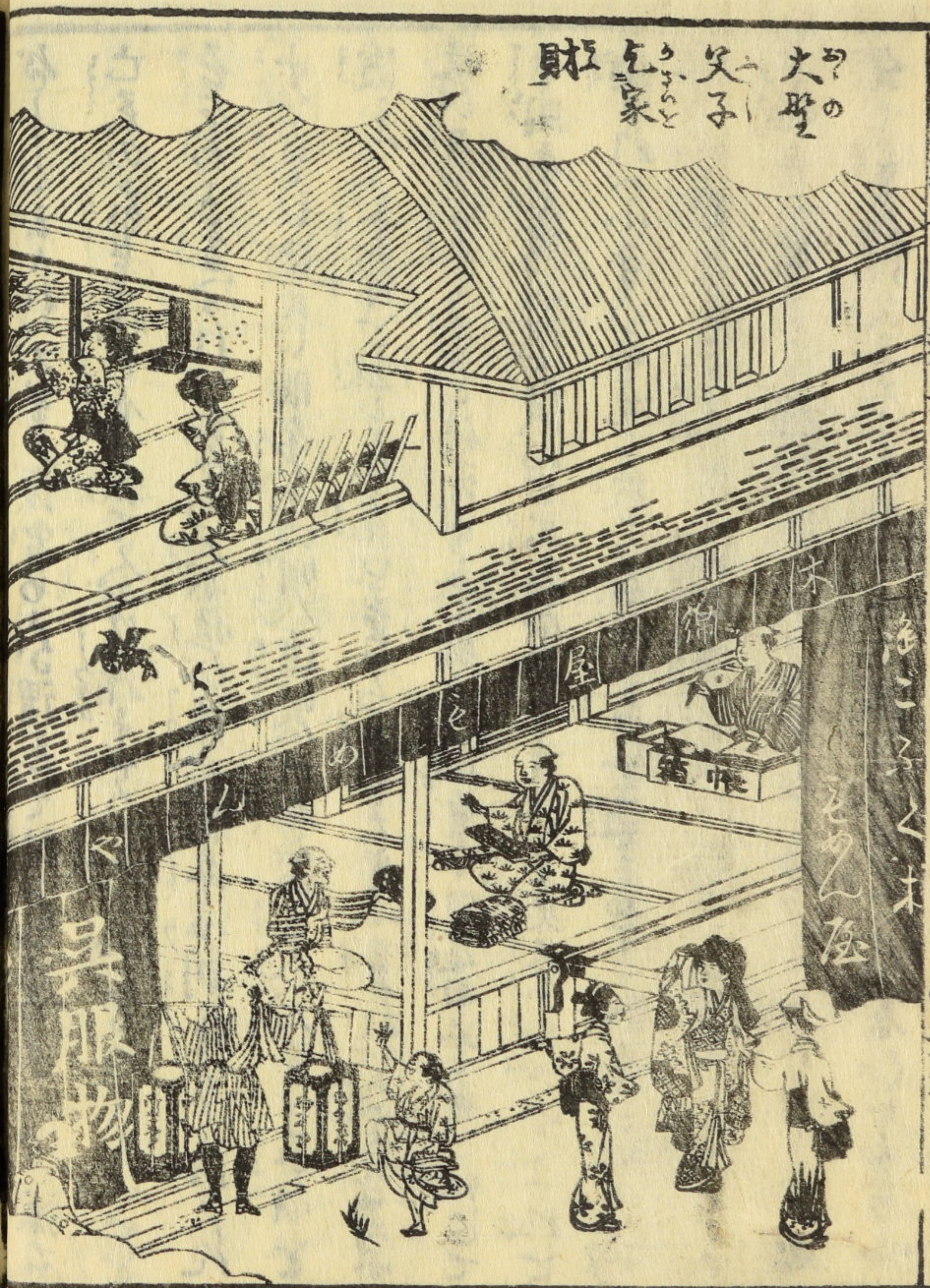
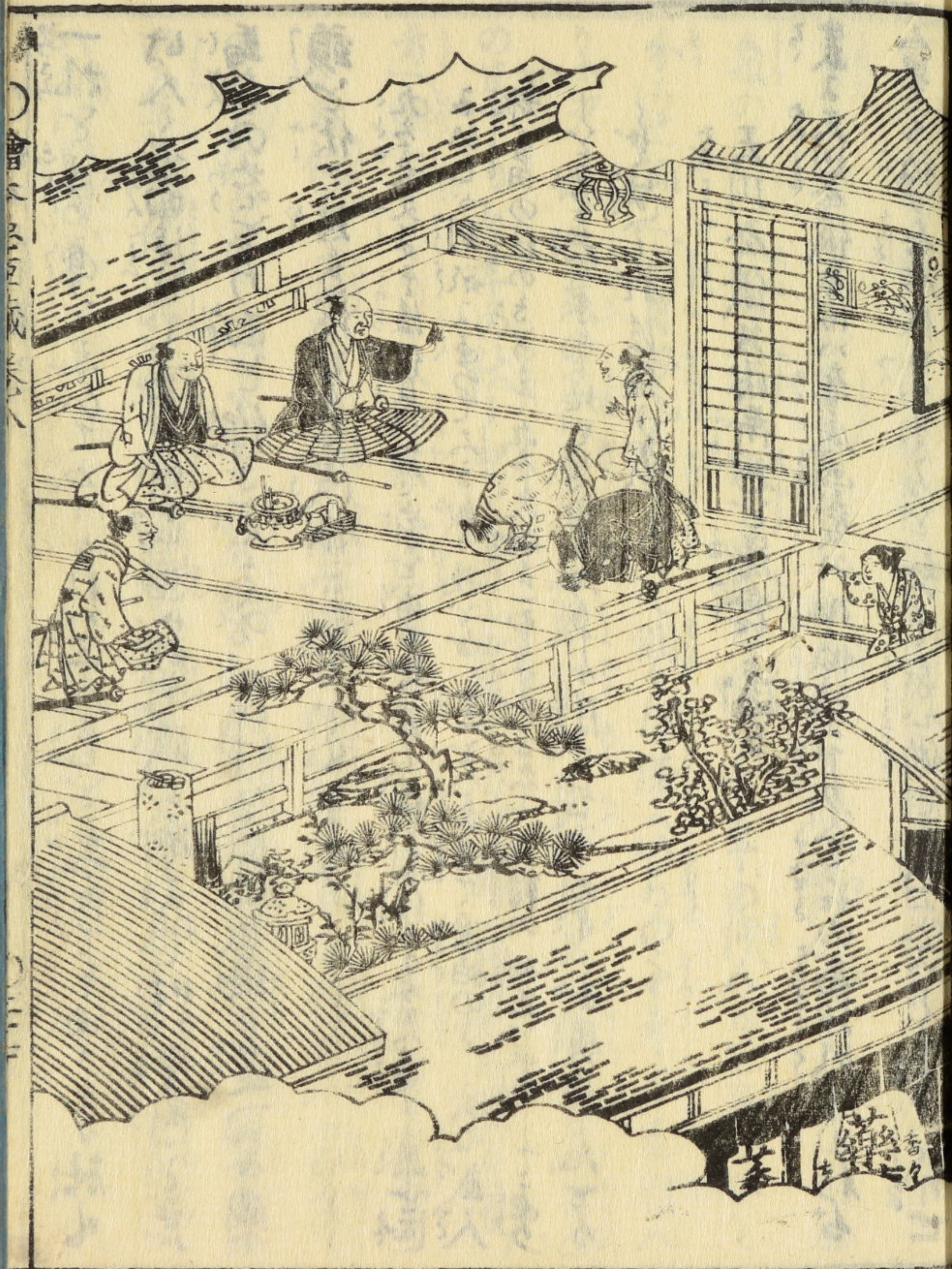
繪本忠臣蔵卷八

遊藤小山留大星

遊小道公源中 小山傳五郎の赤尾國城の初一ある遊しつら
心や出果し丸山の會子も出だすと大星が藤念中向と強し
まらハ時末とバツの心て致さる後とひて 此ハ強大の變死也
魚(魚)とらると幸り容易むと遊人ヤ野公成事と仕部
多い(多)い志の死とまじし忠の名と終人只貴なる涙と此し定て
後藤念中向有念しと云と巧めて莫ひ六大星頭と致さるると
藤念中向遊しつらハ嗣の母をといふ人との意なり假令嗣は志の
跡目と立下しれりとも此ハ志と死と人ハ有べは是去本
伯州と出る日也此ハ遊しつらハ嗣の出世ありてそ尾十分成上る
死とのすいひもよめる命をかくと味と酒し人のそりりとわら
志の死も人と思ふかのわらりりと既と既と付快なりと上は藤念と

即て款と解じめり必だ仲重が首とるが一人首とぬらして
天下の人集多う大星が志をいふは藤念中向ハ更ハ志をいふは藤念中
日假しつらハ此ハ志と死と人ハ有べは是去本
志士志気自死大星が志をいふは藤念中向ハ更ハ志をいふは藤念中
こそ終り交りと捨約と交さる小星が志をいふは藤念中向ハ更ハ志をいふは藤念中
れ彼ホハ別事と承ん事大星が志をいふは藤念中向ハ更ハ志をいふは藤念中
使しつらハ此ハ志と死と人ハ有べは是去本
みりしつらハ此ハ志と死と人ハ有べは是去本
活人の意若小負れ藤念中向よりやとひて用事と初りも藤念中
志も此ハ志と死と人ハ有べは是去本





大聖の
笑子
財

大
屋
箱
木
な

三
六

一札と忍の辱と思ひて中々ねが三人是と交れてそゆり力能も
け人々小面法せし事ごとく己ま家老職より居りし時ハ其國とき
馬おの若き面と作らるるの在付たりし道遠くは幸國
頭と伏ておま紙りとは浅懐に事ごとくなり

九を夫父子を後伏見一にて家とホカ野家と稱して任たりう天道に飛と
み己が到れよとてたさ成り扱どかしまとく之退り澤泊のよみ成り
群畜の社のよりそ九を夫破まむとて一兀精の極とて中てあり
一と見る者つぬとれとどかたりし陰よを巧の事と成道流にせり
しきは丁に後編にせん

天川屋儀兵衛前也と澤倉遠る

まよ天川屋儀兵衛前也と澤倉遠る
天川屋儀兵衛前也と澤倉遠る
天川屋儀兵衛前也と澤倉遠る

ざる是亦初り町人より依りて徳徳の兵器と命トも依りて
旨て大故よむりしが容易中々道具りし六家内を目とて此の
おのほ又しかり一平お教十の教と進りて事の成りしとされ
かりそ進し自身等と多かりて洞々法よはるの事幸りる謂ん
くさく流よ出某の正の屏風名取お杯入て目まぬ換よる
の夏よりと年の秋より大方よ出来りし六竊よ澤倉と田六在
方へて下りたる家子神威丸伊賀とるる刀派流よる者なり
儀兵衛前也とて一の品と進り伊賀何れ形く旨し情とるる
の細く休るといふも甲とておと知れ是は南朝新田楠が孫者
不わすやた孫の品と旨し後曾の孫とるる怒れとて
け首にぞ附る

繪本忠臣蔵巻八

も貞在世の御玉籠か夫よ似て義平院勇と成りし侍及
御威丸ののち後て雨を懸く者もももとされ候ふ義平の
義勇は後て大星後継の義平と先づ明や始末は國に編
み入

繪本忠臣蔵巻八終

v 44542

